

新型コロナウイルス

子どもの貧困 ①

本願寺派総合研究所

上級研究員 岡崎 秀麿

新型コロナウイルスの感染拡大による約1カ月半に及ぶ緊急事態宣言は解除されましたが、今なお私たちの日常生活にさまざまな影響を与え続けています。そこで、新型コロナウイルスによって深刻化する子どもの貧困問題について連載します。

トーベ・ヤンソン（1914—2001）さんが書かれた「ムーミン」は、現在でも多くの方々に読み続けられていますが、「目に見えない子」という短編をご存じでしょうか。

「目に見えない子」とはニンニという女の子のことなのですが、この子は「ニンニのことをほんとうはすきでもないおばさん」に、毎日皮肉を言われ続けて育てられました。皮肉を言われ続けているうちに、ニンニは声が出なくなり、体も徐々に色あせていき、最後にはまったく「目に見えなく」なってしまいました。そのニンニがムーミンの家に来て、ムーミンたちは戸惑いながらもニンニを受け入れていきます。そうする中で、ニンニの体も見えるようになってきたのですが、声と顔だけがどうしても元に戻らないままでした。

しかし、ニンニがムーミンたちとかくれんぼをして遊んでいたとき、ニンニはあることで声を取り戻します。それは、かくれんぼの最中、スティンキーのいたずらでニンニが洞窟に閉じ込められてしまったとき、「私はここよ！」と自分でも驚くほどの大きな声で助けを呼んだときです。そして、顔を取り戻したのは、ニンニが大好きなムーミンママがムーミンパパのいたずらで海に落とされそうになったとき、ムーミンパパの尻尾に噛みつき、「ママに酷いことをしようなんて、許さない！」と怒り、大声を出した後でした。

「子どもの貧困」は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともなって深刻になっていきます。NHK時事公論「新型コロナウイルス 貧困家庭の子どもに支援を」（4月1日）では、両親の経済的状況の悪化によって、十分な食事がとれない、学校を退学せざるを得ないといったことや、虐待・DVの増加が懸念されると指摘しています。

「子どもの貧困」にはさまざまな問題が指摘されるのですが、常に挙げられるのが「子どもの貧困の見えなさ」です。緊急事態宣言後、外出自粛によって街中で子どもを見かける機会はほとんどなくなりました。こうした状況の中に、間違いなく「貧困状態にある子ども」が深刻な問題を抱えているとわかっていても、その「子ども」たちが実際どのような生活をし、どのような困難に直面しているのか、外部からはほとんどわからなくなってしまったのです。

新型コロナウイルス感染症が拡大するにともなって、社会には本当にさまざまな「声」が挙げられました。では、「貧困状態にある子ども」、特に学校入学前の幼児や小学生はどんな声をあげているのでしょうか。ニンニのように「私はここよ！」と叫んでいるかもしれません。もしかすれば、声を取り戻す前のニンニのように声も出せずに苦しんでいるかもしれません。ニンニが顔を取り戻すきっかけとなった怒りのように、感情を爆発させることもせず、じっと部屋に閉じこもったままかもしれません。

どのような状況であっても、どのような人であっても、気づいてくれる人がいる、心配してくれる人がいる、助けてくれる人がいる、受け止めてくれる人がいる。そのような「共に生きる社会」が、「子どもの貧困」の克服にとっては大事ではないでしょうか。